

囲碁棋士

# 吉原由香里

小学生プロが誕生するなど今後注目を集めそうな日本の囲碁界。

今回のインタビューは、大ヒット漫画『ヒカルの碁』で囲碁監修をされた

吉原由香里さん(※1)。

囲碁との出会いや、囲碁がもつ力などについてお話をしていただいた。

※1 『ヒカルの碁』における監修者名は旧姓・梅沢由香里で表記されている。

## 【よしはら ゆかり】

囲碁のプロ棋士。1973年東京都生まれ。6歳で囲碁を始め14歳で加藤正夫9段に入門し日本棋院院生となる。95年女流棋士特別仮採用試験(プロ試験)合格。96年3月慶應義塾大学卒業とともにプロ棋士としての活動を開始する。2007年第10期女流棋聖戦で初タイトル獲得。現在はプロ棋士として戦うかたわらテレビの囲碁番組への出演や講演などを通じて普及にも力を注ぐ。漫画『ヒカルの碁』の監修、『梅沢由香里流 すぐに打てる9路盤』(NHK出版)ほか著書多数。囲碁普及プロジェクト「IGO AMIGO」発起人。

# 難関のプロ試験。 苦しい浪人時代を支えた 「当たり前」の日常生活

全23巻、シリーズ累計発行部数2千5百万部以上という大ヒット漫画『ヒカルの碁』（集英社）。アジア、アメリカ、フランスでも翻訳出版、アニメ化もされたこの作品は囲碁の普及にも一役買ったという。現在小学3年生の息子さんの子育てに奔走しながら対局もこなす吉原先生。囲碁界の総本山、日本棋院<sup>（いんげん）</sup>応接室にさっそうと登場した女流棋士の素顔とは。

## プレゼントの碁盤で 父と覚えた囲碁

小学校時代はどんな子どもでしたか。

一人っ子で、両親と3人家族で育ちました。外で遊ぶのが大好きなおてんばで、校庭でよくゴムとびをやっていたことを覚えています。ピアノ、水泳、書道など小学生がやりそうな習い事はひと通りやりました。これはおそらく、母の意向だったと思います。

囲碁との出会いは、父が6歳（小学1年生）の6月にプレゼントしてくれた囲碁セット。お正月に実家で祖父と叔父が碁を打っているのを見た父が、娘に習わせようと思ったようです。父は、私がプロになる前に亡くなってしまったので、今となつては、なぜ囲碁を選んだのかは確かめようがないの

ですが…。

当時は父も囲碁が全くできなくて、入門書を読んで私に教えていたのですが、近所の入門教室に通うようになり一年くらいすると父を追い抜いて、一緒にさまざまな碁会所に通うようになりました。

当時は碁会所に来ている子どもはほとんどいませんでした。だから、私は周りの大人みんなに育てられたと思っています。

父は、私が打つのを見ていたかったのだと思います。けっこう大きくなってからも試合を見に来て、負けると理由を説明しなさいというさく言われるのがイヤでした（笑）。

お母様は父と娘の囲碁について、どう思っていましたのでしょうか？

母は、私たちを見守るという感じでした。私の子どものころは碁を打っていませんでしたが、父が亡くなる少し前から打つようになって、今も近

くの碁会所で楽しんでいます。

小学校1、2年の担任は、上野先生という方でした。先生は私が碁を習っていることを知ると、時々、「どう？ 頑張っている？」と声をかけてくださいました。その後、別の学校へ異動されたのですが、いつのまにか囲碁を始められていたようです。もう退職されましたが、先生のお住まいが実家の近所で、今は母と一緒に碁を楽しんでいらつしやるようです。けっこう



碁を始めて間もない小学校2年生ごろ。

「芸事や稽古事は6歳の6月6日に始めるのが最も良いと昔から言われるように、父は子どもの成長に合わせて私に基盤を与えたのだと思います」



良きライバルらしく、母からよく話を聞きます。

### 小学校時代、印象的だった思い出は？

3年生くらいの時、「未来に向かって書く手紙」という授業がありました。何年かして戻ってきたその手紙に、将来なりたいものが「誰にでも好かれる有名人」「大金持ち」(笑)、なりたいた職業に「囲碁のプロ」と書いてありま

した。記憶には全然残っていないのですが、そんなことを考えていたんだとビックリしました。

### プロを目指すきっかけは、

#### 14歳で弟子入りした

#### 加藤正夫9段※との

#### 出会いだっただけですが。

加藤先生は、そのころ私が通っていた碁会所の席亭せき亭さん(店主)と親しく

されていて、時々、その碁会所にお見えになっていました。それで、中学2年生の時に席亭さんを通して加藤先生の弟子になるかどうかとお声をかけていたのだって。少ないハンディキャップで先生に勝った時だったと思います。

ただ、私は「弟子になる＝プロを目指す」ということを全然理解していませんでした。加藤先生がすごい方だということとはよくわかっていたので、その先生にお声をかけていただけただから、ありがたく「ぜひお願いします！」(笑)。

加藤先生は囲碁が強いだけでなく、温和で素晴らしい人格者でした。囲碁の世界で、先生のことを悪く言う人は誰もいません。もし弟子入りしたのが加藤先生でなかったら、たぶん私はプロになれていなかったと思います。

### 心が折れかけた時

囲碁をやめようと思ったことはありませんか。

あります。修業がつらいというより、プロ試験になかなか合格できなくて、囲碁をやめていた時期があります。プロ試験というのは、プロを目指す

人同士の対局(総当たりのリーグ戦)で1位になった人だけが合格という制度です。たとえば受験者が10人なら9連勝。基本的には全勝でないと通りません。1日1局、7〜8時間かけて打ち、それが9局。1週間に2局として1カ月以上精神的に張り詰めた状態が続きます。プロ試験は年に1回だけなので、結果が出ないと1年後に再チャレンジとなります。

14歳で加藤先生に入門してから中学、高校とずっと受け続けて合格したのが大学4年。その間、受験浪人が続いていたようなものでした。浪人が長く続くと心が折れてきます。負ける恐怖、夢が潰えてしまう恐怖…。近視眼的になってネガティブ面ばかりにフォーカスしてしまい、せっぱつまっていました。

### つらい時に支えになったものは？

日常生活です。毎日学校へ行行って、友達と会ってくだらない話をする。そういうことがリフレッシュになっていました。大学時代は囲碁を離れて学生らしい日々を過ごしていました。囲碁のことばかり考え続けていたら、本当に心が折れていたかもしれません。

囲碁では「相手にも与える」という発想が大事になる。



そんな中でターニングポイントになったのは、大学在学中に経験した囲碁番組の司会のお仕事でした。担当ディレクターさんが私のことを小学生のころから知ってくださっていて、日本棋院を通じてお声がかかったのです。タイトル戦というのは囲碁界のスーパートップ同士の対戦です。囲碁を打つ人にとってこれ以上はない晴れ舞台。その場に立ち会えるのは、プロ棋士や新聞社の方など限られた人たち

だけです。

そんな憧れの世界を客観的に見る幸運に恵まれ、違う立場から囲碁を見ていくうちに少しずつ思考が切り替わり、視野が広がっていきました。

そして、「やっぱり私はこの世界が好きだ。私が憧れていた世界はここだ。こういう人たちの輪の中に入りたかったんだ」と、プロを目指す気持ちを再び呼び起こすことができました。

## 大局観が身につく 調和のゲーム

囲碁が他のボードゲームと違うのは  
どんなところだと思われませんか？

囲碁というのは、相手を倒すゲームではないですよ。「斬るか斬られるか」ではなく、相手より少しでも陣地が広ければ勝ち。「調和のゲーム」と表現されるように、「相手に陣地を与えながら、少しでも自分が有利に立てば良い」という点が、他のゲームと最も違うところだと思います。

全部を自分のものにしてしまうと勝てません。「このスペースは相手にあげるけれど、自分はここをいただく」というバランス感覚が大事です。

囲碁が強くなると大局観<sup>※3</sup>が身につきます。大局観がつけばつくほど強くなります。大人になると社会がよく見えてくるから、判断力もどんどん高まりますよね。「この状況でどうしたらいいか」が正確に判断できるようになります。囲碁が弱い人というのは木を見て森を見ずで、大人でも部

その後、大学4年で女流棋士特別  
仮採用試験に合格、今に至ります。

分しか見ることができないようです。

囲碁は一手一手の積み重ねで結果が出るゲーム。「着眼大局着手小局<sup>※4</sup>」  
と言われ、頭の中でさまざまなシミュレーションをしながらその局面でベストと思う一手を選択し続ける、その繰り返しです。逆転満塁ホームランみたいなことはめったにないですね。

自分が打っていて楽しいと思うのは、苦しい局面で立てた作戦がうまくいった時や、思考を練った一手で自分に流れが来たりした時。すごくワクワクします。必ずしも、相手が自分の思い通りに打ってくれることだけが楽しいわけではなくて、ある一手から思いがけない展開になっていくのもおもしろいです。

マニアックな楽しみ奥も深そうです。

超一流のプロの対局で、それまで見えなかった世界に触れた時にも感動します。私だったら「もう終わったな」と思うような難局を切り開いて、「こうもつていくと勝負になる」なんていう場面を見せてもらった時には、「感動！」です。マニアックな人にはマニアックな楽しみがいくらでもある世界です。

# 囲碁や将棋など ボードゲームの良さは 一対一で人と向き合えること

## 親子のコミュニケーション ツールに最適！

小学3年生の息子さんとは  
親子で囲碁をされますか？

早い子は3、4歳ぐらいでも打てますが、息子が囲碁をやるようになったのは小学1年生の終わりくらいです。

昨日久しぶりに一緒に打ったのですが、すごく良い親子のコミュニケーションになります。うちの子はそんなに強くありませんが、1年たつと少しは強くなっているんですよ。やっぱり、「習うより慣れろ」のようです。

でも、息子は囲碁より将棋をやりたがりますね。私も将棋は弱いので、小学生相手にムキになって勝ちにいけません（笑）。絶対に「待った」もさせません。それが楽しいみたいです。子どもって上から教えられるのを嫌がりますよね。囲碁の経験がない方はぜひ一緒に打ってみてください。対等の勝負に、囲碁はおススメですよ。

小学校の先生方にメッセージを  
お願いします。

息子は3月生まれ。やはり同級生の

中ではなにかとゆつくりで（笑）、何を  
するにも時間がかかるタイプのよう  
です。同級生の女の子を見ていると、も  
のすごくしっかりしていて4、5歳は  
上に見えます。

学校では、同じクラスに息子みたいな  
子もいれば、1つ言えば10わかるような  
飲み込みの早い子もいますよね。そ  
子によって目覚める時期という成長  
のスピードって本当にさまざま。今は  
無理に何かを教えるよりタイミング

を待つのがいいのかなと、悩みつつじっ  
と観察しています。

そういうあらゆるレベルの子どもた  
ちをまとめる先生方は、本当に大変だ  
と思います。自分が子どもを持ってみ  
て、初めてわかりました。

また、男の子はどうしてもよくケン  
カをしますね。大勢の子どもたちに先  
生がしっかり目を光らせるにも限界が  
あるでしょうし、ご家庭からの要望も  
いろいろある中で想像を絶するような

仲邑菫さん



## 続々プロデビュー。 囲碁界で活躍する 子どもたちにエール

今年1月と2月、<sup>なかむらすみれ</sup>仲邑菫さん、<sup>うえのさくら</sup>上野梨紗さんがプロ棋士になること  
が相次いで発表されて、大きなニュースになりました。仲邑さんは史上最年少の10歳、上野さんは12歳。2人ともあの年齢で、あれだけ打てるというのは本当にすごいことです。このまま順調に育ってくれば必ず世界チャンピオンになれると思います。

これからはプロの世界で揉まれながら力をつけていってほしいですね。周りは皆、精いっぱい戦いますよ。その真剣勝負の中で、経験を積むことがいちばん大事。私もすぐに対戦するのは遠慮したいですが（笑）、頑張ってもらいたいと、応援しています。

（談・吉原由香里）

※仲邑さんは日本棋院が新設した「英才特別採用枠」に合格、上野さんは「女流棋士特別採用試験本戦（22歳以下の一定の基準を満たした女子のみが参加できるリーグ戦）」で1位となり、2人とも今年4月1日付でプロとなった。



苦しい局面を切り開いていくのも囲碁の楽しさ。

を願いながら(笑)、必死な毎日をご過ごしています。

## 人と向き合う 機会が減る AI社会で

今後の抱負を  
教えてください。

今やりたいと思ってるのは、囲碁を覚えたいと思ってる人向けのアプリケーションの開発です。しつこく問題を繰り返しやって、そっぽを向きながらでもできるようになってからステップアップする、スマートフォンアプリの開発を繰り返したいと思っています。

心労もあるのでは、と思います。  
でも「先生との出会いで人生が開けた」という話もよく聞きます。大変だとは思いますが尊いお仕事ですね。  
母親としては「どうしたらいいんだろ」と日々悩み葛藤しながらの子育てです。いつか良い思い出になること

それも、楽しく遊び感覚でできるもの。囲碁が打てるようになれば人との出会いがあります。幅広い世代の方々との社会的な地位も職業もいっさい超越して交流できます。私自身、囲碁のおかげで本当にいろいろな出会いに恵まれました。

今年10歳のプロ棋士(仲邑菫さん)が誕生しましたが、今、最高齢のプロは92歳です(※5)。このお2人が対局することも十分あるでしょう。82歳の差があつて対等に戦えるものって、なかなかないと思います。

囲碁や将棋などボードゲームの良さは「人と一対一で向き合う」こと。私は囲碁の対局に限らず、人と向き合うと無意識に「この人、気合いが入っているな」とか「気が抜けているな」と感じる場合があります。やはり長年、人と向き合ってきたからだと思います。囲碁に限らず、これからの世界はAIやスマートフォンなどデジタルなものと過ごす時間が長くなって、人と向き合う機会がどんどん減っていくと思います。

だからこそ、人と向き合うことが大事になるように思います。その経験を積み重ねる機会として、囲碁をもっと広めていけたらいいなと思っています。

最後にプライベートについて伺ってみました。ご主人は元Jリーガーの吉原慎也さん。引退後は建設関係の会社を運営されています。「主人は九州と東京を行ったり来たり。それでも子どものことは可愛くて仕方ないようで、時間ができると息子とサッカーを楽しんでいます」と、笑顔。現在月に3局

ほど対局があるという吉原先生。ママ棋士としてますます活躍されそうです。ポジティブパワーいっぱいのお話、ありがとうございました。

※2 加藤正夫(1947~2004年)七大タイトル獲得数歴代4位、名誉王座。

※3 2004年脳梗塞に倒れ急逝(享年57)。2005年その功績により旭日小綬章追贈。

※4 大局観。自分がその局面でどの程度有利(不利)にあるのかを、長期的かつ全体的な視野に立つて的確に判断する能力。

※5 着眼大局。着手小局。大きな視点から見て、小さなことから実践する。  
※5 杉内寿子(すぎうちかずこ)8段。今年3月7日、女流タイトル「女流本因坊」の挑戦権を争う本戦トーナメント1回戦に出場し、自身の持つ本戦最年長出場記録を更新した。

### 読者プレゼント!



吉原由香里さんのサイン入り扇子を3名様にプレゼントします。応募の詳細は35ページをご覧ください。